

モンゴル国カザフ人の民族文化

三本, 泉
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2339083>

出版情報 : 九州人類学会報. 32, pp.88-93, 2005-07-16. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :



モンゴル国カザフ人の民族文化

三本 泉 (九州大学大学院)

1. はじめに

本稿では、モンゴル国に居住するカザフ人の近年の行動を通してみることによって、旧社会主義国において、体制移行期に民族文化が如何にして表現されているか、そしてその行動がどのような意味を持っているのかを示すことを試みる。

旧ソビエト連邦の崩壊以降、旧社会主義国家では社会、経済、文化面のいずれにおいても、急激な変化がおきている。社会主義から資本主義へと体制が移行する段階にあるこれらの国々では、この体制移行が様々な面で市民に苦勞を強いることも多い反面、政治的には以前と比較すると格段の自由を得た。社会主義思想が衰退した現在では、その空隙を埋めるために、宗教や、民族意識に基づく民族的な主張といった行動が顕著に見られる。民族が複雑に分布し、居住している中央アジア・モンゴル地域では、社会主義時代においても、民族は重要な要素であったが、それは社会主義思想によって制限された範囲内であった。現在の資本主義体制下では、社会主義時代とは異なった、民族に対する意識がもたれている。民族意識にもとづく民族主義的な行動が例として挙げられる。民族の英雄を大々的に祭り上げるといった、社会主義体制のころには不可能であったことを行っており、モンゴルではチンギスハーンに対する崇拜がその最も顕著な例である。

モンゴル国内に居住するエスニックグループであるカザフ人の社会においても、民主化以降、大きな変化がおきている。モンゴル国の人口の約5%を占めるエスニック・グループであるカザフ人達は、主にモンゴル国西部の、中国・ロシアと国境を接し、カザフスタンとも距離的に非常に近いバヤンウルギー県に居住している。モンゴル国においては、ハルハ・モンゴル人について第二の規模を持つエスニック・グループである。モンゴル国内のカザフ人は、ほとんどがモンゴル語とカザフ語のバイリンガルであり、モンゴル人と話すとき以外、自分達の間ではカザフ語を使用してい

る。また、県内にはカザフ語の学校とモンゴル語の学校の両方がある。住民の大部分は、牧畜業を営む牧民であり、昔ながらの生活スタイルを守って暮らしてきた。このような状況から、カザフ語およびカザフ文化の保存に適した環境であった。現在ではあまり行なわれていないが、カザフ後の本も出版されていた。このようにモンゴル国のカザフ人達は、比較的恵まれた環境のなかで暮らし、政治家や著名な学者などを輩出し、モンゴルの政治や学界に少なからず影響を及ぼしてきた。

2. カザフスタンとモンゴル国の関係

ソ連邦の崩壊により、モンゴル国のカザフ人にとって状況は激しく変わった。最も、カザフ人にとってインパクトがあったのは、近年になるまではモンゴル国とカザフスタンの間の交流は限られたものであったが、民主化後、自由に行き来できるようになった、という点である。現在のカザフスタンは、ただ単に親戚が住んでいるというだけではなく、自分達の仮想的な移住先、就職先、あるいは留学先である。それゆえ、カザフスタンの政治、社会の動向は彼らにとって重要な意味を持つ。民主化以前と比較して、カザフスタンは、モンゴル国に居住するカザフ人にとって、重大な意味を持つものとなった。しかし、同じカザフ人が居住する国であるが、モンゴル国とカザフスタンの二国間の社会的状況の差異は、最近、頻繁に指摘される点である。

カザフスタンにおいては、ロシアによる植民地化、ソ連邦への併合という時期を通して、いわゆる「ロシア化」が進行した。言語、服装、政策、建築様式等、様々な面でロシアからの要素が流入し、現地に居住していたカザフ人達は、時にはなかば強制されて、それを受け入れていった。現在も、特に都市部においてはロシア語を日常会話として使用し、カザフ語を使わない(使えない)カザフ人達も多数いる。社会主義時代は、ロシア人が人口の大半を占めていたこともあり、公共の場

でのロシア語の普及が推進された。ソ連邦の崩壊後、独立した旧社会主義国では、この「ロシア化」の反対方向の現象が起こった。カザフスタンにおいては、国内のカザフ人、ロシア人、その他の多数のマイノリティ集団のバランスを取りながら、政策を進めることが行なわれている。表面上、ロシア人を排斥しないように配慮しているが、実際にはカザフ人にとって有利であり、ロシア人およびその他のマイノリティ集団にとって不利な政策が実行されている。就職の際に、カザフ語使用者を優先して採用するといった例があげられる。カザフスタンの名称民族であり、歴史的にロシア人より以前からこの土地に住み着いていたカザフ人の権益を守ろうという動きが、民主化運動と前後して、盛んに行なわれてきた。独立後、ロシア人がロシアに大量に引き上げていったこともあり、以前はロシア人優勢であった人口も、今日では逆転してカザフ人が規模的に第一のエスニック・グループとなった。また、ソ連時代にモスクワの中央政権によって押し付けられていた、ロシア語優先使用をはじめとする方針を廃止し、カザフスタンをカザフ人のものとして新たに構成していくというのが、現在の潮流である。しかし、当然反発もあり、依然として人口の数十パーセントを占めるロシア人や、他のマイノリティ（ドイツ人、朝鮮人等）からは、自分達の権利がないがしろにされないように、政府に対して意見や抗議が寄せられている（Surucu 2002）。第一のエスニック・グループになったとはいえ、依然として多民族国家であるカザフスタンの政府にとっては、同胞である、国外に住むカザフ人も、政策の視野に入れて活用していくことが、これからのカザフスタン国家建設にとって、重要な点である。

また、モンゴル国とカザフスタンとの関係を経済的な面からみれば、モンゴルにとってカザフスタンは、中国、ロシアに次いで第三の隣国であり、輸出国・輸入国として重要な相手である。工業面での重要なビジネスパートナーであり、両国の経済発展の為に協調的な関係を維持していく必要がある（バトバヤル 1997）。モンゴル国第二のエスニック・グループであるカザフ人は、両国間の交流において、お互いに無視できない重要な存在である。このように、モンゴル国に居住するカザフ人達は、経済的交流の面からも、またカザフスタ

ンの政策においても、両国間の関係において重要な存在となっている。

3. ディアスポラ

カザフスタンにおいて、民族間関係が緊張をはらんだものになりつつある現在、モンゴル国のカザフ人のように、国外に居住するカザフ人がカザフスタンにとってどのような意味を持っているであろうか。カザフ人はカザフスタン以外の国にも多数居住しており、彼らは最近ではディアスポラとして捉えられることが多い。カザフスタン国外に住むカザフ人の中には、カザフスタンとは別の環境に住んでいた為に、「ロシア化」といったカザフ人にとって好ましくない影響を免れた人々もいる。そのもっとも有名な例がモンゴル国に居住するカザフ人である。カザフスタンのカザフ人から見れば、モンゴル国のカザフ人は、伝統的な民族文化を継承してきた人々として映る。そして、カザフスタン政府は、外国に居住してきたカザフ人がカザフスタンへ移住することを奨励している（Cummings 1998）。外国に居住していた為に、「ロシア化」を免れた人々であり、その人々をカザフスタンへ呼び寄せれば、「ロシア化」されたカザフ人にカザフの伝統文化や言語を教えることができる考えたのである。カザフスタンにおいては、「カザフ世界会議」が開かれた1992年から、外国に居住するカザフ人の帰還政策が施行された。この政策は、新国家の領土を合法化し、カザフスタン内部のカザフ人の人口比率上の弱点を克服することと、過去において、ソビエトの行き過ぎた政策（強制的な集団化）によって、カザフ人の大半が命を落としたことを振り返る、という政治的な思惑と絡んでいる。この政策は以下の3つの原則によってなっている。帰還の対象となる人々は、民族的にカザフ人である人々、帰還するカザフ人には二重国籍が認められる（他の民族は不可）、通常は市民権取得に5年以上居住することが必要だが、帰還したカザフ人は除外する、である。このようにカザフ人を極端に優遇した政策によって国内のカザフ人の人口比率を増やすことを目的としている。また同時に、ロシア人が多く居住し、カザフ人の人口が希薄なカザフスタン北部に、帰還したカザフ人を住まわせることによ

て、バランスをとろうとしている。カザフスタン政府は、帰還政策によってカザフスタン内の全カザフ人にとって望ましい環境を整えようとしている。1994年には、モンゴル国とカザフスタンの間で、移住規制に関する協定が結ばれている。モンゴル国からは実際には、1991年ごろから、数万人の単位でカザフ人がカザフスタンへと移動していき、バヤンウルギー県の人口は、大幅に減少した。しかし、1993年をピークにして、このモンゴルからカザフスタンへの移動は落ちつきを見せ、カザフスタンに行ってはみたがモンゴルへ帰ってくる人々も多数いた。これは、カザフスタンへ行っては見たが、良い就職先を見つけないことができなかったという理由や、エスニシティ上のトラブルにより、居心地が悪くなったという理由などが挙げられる。後者においては、カザフスタンに居住する、カザフ、ロシア以外のエスニック・グループとの軋轢や、カザフ人同士の間でも、ロシアの強い影響を受けたカザフスタンの「都会的」なカザフ人と、モンゴル国などの「伝統的」な生活スタイルを守ってきたカザフ人の間では、お互いを同等と認めることが難しい、といった事例もある。現在では、両国間の間を、ビジネスや留学といった目的で行き来する人々が増えている。しかし、モンゴル国に住むカザフ人にとっては、カザフスタンは自分の家族や親戚が居住する国であり、「カザフ人の国」という名前を持つことから、心情的にも自分達にとって、身近な存在である。

4. 社会主義時代の民族文化

このように、近年のモンゴル国とカザフスタンの間の交流や、人口移動といった側面においては、エスニシティ、民族文化が重要な要素として扱われている。近年に入ってこれらの要素の扱われ方に変化が起きたわけであるが、民主化以前と以降を比較して、旧社会主義国でどのように扱われていたかを、簡単にまとめてみる。

社会主義体制下で、各民族の文化は人類学者、民族学者たちによって研究され、エスノグラフィ―として発行された。また服装・道具などの物質文化は博物館や研究所等に保管された。これらの研究においては、社会主義思想に基づく発展段階説で説明されていたため、ユーラシアの諸民族は、

ソビエト勢力と接触するまでは、ほとんど未開か半文明の状況にあると理解された。社会主義思想にふれ、その恩恵に触れることによって、文明段階へとたどり着くことができた。そして、各民族の文化の要素は、社会主義によって取捨選択され、あるもの（家父長制や宗教等）は後進的とされ、廃止の対象となった。社会主義思想に合致するもの（民族言語や服飾等）は、存続することを認められ、発展させることを奨励された。ソ連邦においては、形式的には民族主義が残されているも、究極的には、社会主義思想が内在化した人間を作り出すことが目的とされていたが、この試みは失敗した。長いあいだ抑圧されていた民族主義は、ソ連邦の崩壊後、社会思想が衰退したことによって生じた空隙を埋め、宗教とならんで、各民族のアイデンティティ再構築の礎となった。また、地域によっては民族間での軋轢や紛争という形で噴出することとなった。

西側の研究者による、社会主義時代から現代にかけての民族文化を対象とする研究の傾向をみると、社会主義を単なる抑圧的な存在としてみるのではなく、社会主義が民族意識を保存、補強している面を取り上げ、マイノリティであるエスニック・グループの文化が、ロシア人を頂点とする政治的体制のなかで、如何にして上層部と交渉し、社会主義思想に合致するような形へ変化していったか、という視点からなされる場合が多い。グラントの著作にあらわされているように、近代化をすすめるソビエト連邦、ロシア主導の体制に取り込まれていく過程の中で、マイノリティであるエスニック・グループは、自分達のアイデンティティを維持、強化するために、ソビエトの体制に同化していったという事例がある (Grant 1995)。

塩川が論じているように、社会主義が伝統文化を一方向的に抑圧したというよりも、むしろ、社会主義は伝統文化を部分的に温存し内部に取り込んだ、という見方のほうが適切である (塩川 1999)。民族語を残しそれを保存する為の手段 (テキストを整備するといった) を整えてやることや、式典の時などに各民族が民族衣装をまとって参加している、といったことは、各民族の主体性を尊重している、と目されマイノリティに対して充分な配慮しているというソ連邦の公式見解を裏付ける。一方、民族の英雄などについて、触れることは厳

禁とされた。もし公の場で、自民族の英雄を肯定すれば処罰された。このように、社会主義思想に合致する要素のみが取り上げられ、保存された。それ以外の部分、社会主義思想からみて、後進的と判断された要素は、近代化するべきの対象とされた。

では現在では、民族文化に対する認識はいかなるものになっているであろうか。社会主義時代においては、過去の遺物という見方がされ、もしくは言語や衣装といった社会主義体制のなかで、容認された範囲でのみ使用されるものであった民族文化が、現在では、観光資源化したり、民族主義的主張に使用されるというように、積極的に用いられるようになりつつある。これについてはモンゴル国のカザフ人の事例を用いて次節で述べる。

5. モンゴル国カザフ人の民族文化

独立後、カザフスタンにおいては、道路の名前をロシア名からカザフ名に変えるということや、政治的に主導的な立場に立つ人間がロシア人からカザフ人に交代したなどが起きた。これは、現カザフスタン政府のカザフ民族主義を推進する方針の事例である。スケールのにはかなり小さくなるが、モンゴル国のバヤンウルギー県内においても、同様の事例は起きている。バヤンウルギー県の県庁所在地であるウルギー町の道路の名前の変更が、ここ数年（2002～2004年）の間に行なわれ、道路の数そのものは少ないものの、それぞれにカザフ人の著名人の名前が付けられている。町の中央広場に通ずる主要な道路には、カザフの民族的な英雄の名前が付けられた。この道路にはその英雄の石碑も立てられている。この石碑は2000年に設置された。また、町の中央広場に面した公会堂にも、別のカザフ著名人の業績を記したプレートがかけられた。

民族文化が表現されているものとして、わかりやすい例としては、鷹匠の祭がある。カザフの鷹匠は、イヌワシを使用して狩りを行なう。2000年より始まったこの祭は毎年秋季に開催される。回を追うごとに、規模が徐々に拡大している。この祭は2日間にわたっておこなわれる。主催者は、地元の議員や学者、旅行会社であり、回を追うごとに観光客が増えており、内外からの注目度が高

まっている。内容としては、鷹匠の服装・持ち物の審査、鷹匠の鷲をコントロールする技術のコンテスト、競馬等が行なわれる。2004年秋には、イヌワシを使って生きた狼を捕獲させるというデモンストレーションも行なわれ、より彩り豊かな祭へと変わりつつある。イヌワシは、カザフ人にとって象徴的な鳥類であり、鷹匠はカザフ人が対外に誇れる伝統技能として、最近ではよく宣伝されるようになった。最も、社会主義時代においては、鷹狩は細々と草原で行なわれていた技能であり、一般の人々は目にする機会はほとんどなく、エスノグラフィーの中に記載されるべきものであった。それが現在では、カザフ民族の象徴として活用されるようになり、メディア等で鷹匠を目にする機会も増えた。自分達の伝統と過去を呼び起こそうとして、利用される存在へと変化したわけである。

この鷹匠の祭では、主催者達が旅行会社と提携して、欧米系の外国人旅行者を多数、呼び寄せるということも行なっている。会場においては、カザフの紋様入りカーペットや、鷹匠の使う帽子、毛皮の服などの服飾品のほかにも、カザフの民芸品などの販売もしており、商売のやり方も年々上手になってきたといえる。

また、民族文化の保存の一例として、鷹匠の団体として、鷹匠協会も設立された。この団体も近年創立されたもので、鷹匠の文化の保存、発展を目指している。この協会の一つの業務はイヌワシの保護である。バヤンウルギー県と中国との国境に沿ってのかなりの部分が、モンゴル国内でも比較的大きな国立公園に指定されており、絶滅の危険性もある動物の保護地域になっている。この公園を管理している、地元のレンジャーと協力して、鷹匠が捕獲して狩りに使用する、イヌワシの保護を行なっている。また、日本の団体と協力して、鷹匠の生活向上を図ることもおこなっている。これは、イヌワシから抜け落ちた羽根を、鷹匠に保管しておいてもらい、協会が鷹匠の世帯を回り、買い付ける。その羽根を日本に輸出し、弓道に使う、矢羽根として買い取ってもらう。程度のいい羽根は1本1ドルほどであり、数十本、供出できた場合、何十ドルになる。モンゴル国内でも、最も貧しく、失業率が高い県でもあるバヤンウルギー県の鷹匠にとっては、大きな現金収入である。このようなサポート体制をつくることにより、体

制移行期の経済的困難さを乗り切ろうとしている。

生活の手段として、民族文化を利用するという別の例は、今まで単なる生活の一部として行ってきた工芸品の製作を、市場向けに行なうという例である。あるインフォーマントからは、以下のような話を聞いた。主婦である彼女の世帯は、民主化後の経済的な混乱期に、勤務先からの収入だけでは家計が苦しくなった。そこでカザフの紋様入りのカーペットを製作し、それを販売することを始めた。その収入を得ることによって、家計はある程度、賄うことができた。カーペットの製作はカザフにおいて通常は、女性が行なうものであり、その方法は母から娘へと受け継がれていくものである。カザフのカーペットは中央アジア的な紋様が特徴であり、バヤンウルギー以外のモンゴル国内ではまず、みられることはない。バヤンウルギーへの観光客が増えるに従い、カザフの紋様入りカーペットの購入を求める人々は増えている。現在では、家庭で製作するほか、現在では欧米系の女性が主体となったNGOが、カーペットの製作工場を立ち上げ、カザフ女性の従業員を雇って製作し、販売している。いずれにせよ、観光客が価値を見出すのは、モンゴル製でもロシア製でもなく、中央アジアの雰囲気を感じさせた、カザフ紋様入りのカーペットであり、民族の歴史を経て、親から子へと伝わってきた意匠が、民族文化として活用される。このようにカザフの民族文化は、資本主義体制の中で、利用されており、言い換えれば、観光資源化が進行しているとも言える。

6. おわりに

現在の旧社会主義国の民族文化に対する認識は、ブルーベイカーが「民族化」と呼ぶ、これまでの社会主義時代に実質的な権力を持たなかった民族

エリート達が、それに対する賠償として独立後、自民族の地位を向上させる為に行なう政策、に大体の線で沿うものである(Brubaker 1996、岡2004)。ロシアからの強い影響を受けてきた結果、ロシア的な要素を政治、エスニシティといった様々な面に多分に含むことになったカザフスタンに住むカザフ人と、比較的「伝統的」な生活を続けることができたモンゴル国のカザフ人。カザフスタンのカザフ人にとっては、モンゴル国のカザフ人はより「伝統的」な文化をもっている為、カザフスタンを「民族化」するための潜在的な同盟者として認識される。モンゴル国のカザフ人も、現在、ほとんどの旧社会主義国で起きている民族文化復興の動きに同調して、自分達も鷹匠の祭をはじめとした民族文化を宣伝し、またそれを利用して生活の手段を得るということをおこなっている。民族文化を積極的に活用する行動により、カザフスタンとモンゴルのカザフ人の間で、政治的な面でつながりを持たせており、民主化後のカザフ人のアイデンティティ再構築に貢献している。このように、民族文化の対する認識は社会主義時代とは異なり、民族学者等によって調査研究されるものといった受動的なものから、自分達が主体となり、積極的に活用してゆくべきものとして、認識されるようになっていく。

付記

本研究の現地調査は、平成13年度 アジア太平洋センター(現福岡アジア都市研究所) 若手研究者助成と、平成16年度 濫澤民族学振興基金 大学院生等に対する研究活動助成(名義:永井泉)より、それぞれご支援を受けて実現した。記して感謝する。

参考文献

- 岡 奈津子 2004 「民族と政治:国家の「民族化」と変化する民族間関係」 岩崎一朗他編著 『現代中央アジア論』 日本評論社
- 塩川 伸明 1999 『現存した社会主義』
- T. バトバヤル 1997 「中央アジアの新たな動向」 『海外事情』 Vol.45 No.5 pp.57-67
- Brubaker, R. 1996 *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*. Cambridge UP.

- Cummings, S. N. 1998 "The Kazakhs: Demographics, Diasporas, and "Return"" in King and Melvin ed. *Nations abroad*. Westview Press.
- Grant, B. 1995 *In the Soviet house of culture*. Princeton UP.
- Surucu, Cengiz. 2002 "Modernity, nationalism, resistance: identity politics in post-Soviet Kazakhstan" in *Central Asian Survey* 21(4) pp385-402.
-